



いずみ

No.62

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 32



《門》

永野 光一

(2 ページに「作者の言葉」)

第69回二紀展(2015年)で文部科学大臣賞を受賞した作品です。
私の制作において「熱する」という行為があります。熱するということは形が変化していくことにつながっていき、人間の心の移動とか時間の移動にもつながっていくのではないかと考えます。

(永野 光一 二紀会委員、北翔大学芸術学科教授)

タイトル：《門》

制作年：2015 年

素 材：ステンレススチール

サイズ：730×700×500 mm

設置場所：作家所蔵

雪降る庭園と彫刻たちの休息

学芸員 山田のぞみ

毎朝、バス通りから彫刻美術館へと登る道すがら、宮の森の季節の移り変わりを感じます。4月、初めて出勤した日にはまだ葉もまばらな山々が、いつのまにか緑に萌え、鮮やかに紅葉したかと思えば、あっという間に梢に霜が降りました。今は白く雪におおわれて、このまま春を待つことになりそうです。

休息しているのは山ばかりではないようで、春から秋にかけて、毎日のように美術館を訪れる小学生たちを出迎えていた庭園の彫刻にも雪がつもり、しばしの休眠に入ったかのようです。庭園におかれた彫刻は、「走らないで」「作品にさわらないで」と、あれこれ守るべき注意事項を子どもたちが課されてしまう美術館において、大切な「遊び仲間」となってくれます。彫刻に直にふれ、その冷たさ、温かさ、そして確かな作品の存在感を小さな手のひらで感じとってもらえるのが一番の美術館体験だと教えてくださったのは、長年子どもたちの作品鑑賞をサポートしてこられた、あるボランティアの方でした。そしてこの半年ほどは、友の会の皆さまとともに当館の彫刻の清掃や野外彫刻保全セミナーに参加し、彫刻について学びを深められる機会にも多く恵まれました。この美術館がたくさんの方に支えられていることを実感し、これからの日々を無駄には過ごすまいという思いを強くしております。

さて、当館の本館では、12月16日から4月15日まで、「ふれる彫刻・手でみるアート」展を開催しています。野外彫刻の冬眠期間には美術館で、本郷新の作品を味わってみるのはいかがでしょうか。



「記憶素子—丸山隆と教え子たち—」展に寄せて

記憶素子展実行委員長 藤本 和彦

「彫刻家としての丸山隆、教育者としての丸山隆」の足跡をたどるべく、2017年10月から12月の約2カ月間、本郷新記念札幌彫刻美術館と実行委員会の共催という形で「記憶素子—丸山隆と教え子たち—」展を開催いたしました。丸山先生が急逝されてから2017年で15年目になります。その節目の年に先生の作品世界をあらためて広く紹介するとともに、先生から薫陶を受けた当時の学生が現在どのように展開しているのかを紹介することを目的としました。

丸山先生が北海道教育大学で教鞭をとられたのは1985年から2002年まで。その間に彫刻研究室に在籍し、先生の教えを受けた学生は100余名にのぼります。授業では造形や思考の可能性を的確に導いてくれる刺激的な学び舎となりました。また、学外での活動も、想像した、とてつもなく濃密なものでした。御影石を素材とした石彫、二度にわたる超大型の「野焼き」作品の制作、設備も皆で作っておこなったブロンズやアルミの鋳造作業。また、自身の個展開催からパブリックアートの制作・設置、公園の設計や施工まで、常に学生へその背中を見せ、時々、案件や制作話、「こだわり」や「表現の重要性」などを熱心に聞かせてくれました。それぞれが制作を続ける中で、また、人生の節目やふとした時にかつて教えられたことや交わした言葉を大切に思い

起こす教え子も大勢いると思います。

本展では先生からかけていただいた印象的な言葉（壁面での投影展開）や先生の作品と教え子の現在の作品を並べて展示することで、教育者としての丸山先生の側面にもスポットを当てていきたいと考えました。

本来であれば、丸山先生に教授された全員の作品を展観できれば良いのですが、展示面積の関係上、美術館と協議し、現在、表現分野で精力的に活動をしている20名に声を掛け、一期11名、二期9名の展開を紹介しました。

彫刻美術館では研修室に先生や研究室をふり返るブースを設け、当時の授業課題などの学生作品や先生の足跡などを展示。会期中は一期、二期それぞれでアーティストのリレートーク、ワークショップを開催し、懐かしい方や初めての方も交えて貴重な時間を過ごすことが出来ました。

他にも長沼の先生のアトリエでおこなわれた「思考」を振り返るキャンプ。同時期に開催された鴨々堂での「タカシコウ」展では、教え子でも初めて見る先生のエスキースやアイディアノート、様々な写真や映像などで埋め尽くされ、皆一瞬で時間がさかのぼる特別な場所となりました。いろいろな方々のご理解やご協力のおかげで実現できた、この特別な「時間」をこれからも大事にしていきたいと思っています。

夕張・石炭の歴史村「採炭救国坑夫の像」

長期保全方策を模索

友の会副会長 高橋大作

夕張市「石炭の歴史村」内にある「採炭救国坑夫の像」は昭和19年（1944年）6月に約2週間で現地制作された高さ3.63mのコンクリート彫刻です。

昭和19年にさかのぼってみましょう。当時は太平洋戦争の敗色の色濃いさなかで、石油を輸入することを断たれ、軍需物資の生産に不可欠な石炭を増産するのは絶対的な命題でした。炭鉱労働者は「鉱兵」と呼称を改められ、入坑する前には皇居の方角に向かって敬礼をする宮城遥拝をしなければならない時代でした。この像も最初は「進発の像」として作られました。進発とは戦場に向かって出発することです。炭鉱夫の鼓舞が目的でした。軍需省により「軍需省が必要とする美術に関する総ての問題に即応之を処理し、以って軍需生産の拡充増強に挺身協力するを目的」とした「軍需生産美術推進隊」が結成され、そのうち彫刻を担当する「彫塑班」の4名、中村直人（なおんど）、古賀忠雄、円鏑勝三、木下繁らによってこの像は制作開始され、顔のモデルはNHKテレビ小説「マッサン」の主人公でニッカウキスキーの創業者竹鶴政孝氏の実兄可文（よしふみ）氏です。同班は北海道炭礦汽船（株）夕張炭鉱のあと、芦別市の三井芦別炭鉱、上砂川の三井砂川炭鉱と連続して制作していきました。終戦の8月まで

の約1年半で全国の炭鉱や油田で制作された像は全部で11体、そのうち9体が複製を含めて現存しています。

この像は制作当時、には鉱業所（事務所）の前に、戦後は「救国採炭坑夫の像」として操込所前に移され、戦後復興の石炭増産のシンボルとされました。石炭から石油へのエネルギー革命が起きたあと、1978年（昭和53年）には夕張炭鉱が閉山。新たな役割として、観光開発の一環として作られた「石炭の歴史村」の石炭の露頭がある前に移設され現在に至っています。戦時期のプロパガンダを担った貴重な美術作品であり、そしてまた石炭産業の変遷を表わす産業遺産でもある歴史的な像です。

現在この像は一部に苔が生え、上部は黒くカビが覆い、また、採炭の際、使用するピックの一部や左手の甲などが爆裂破損しています。それに対して夕張市の文化財保護委員会や教育委員会を中心にこの像を長期保全すべきとの声が持ち上がりました。皆様もぜひ夕張まで足をお運びください。



リポート

友の会秋のバスツアー

快晴のディマシオ美術館見学

友の会恒例の秋のバスツアーが10月6日に行われ、日高管内新冠町のそれぞれユニークな「ディマシオ美術館」と「レ・コード館」を見学した。当初は9月18日に予定されたが、台風の影響で中止。その後、関係者の好意などから改めて実現した。フランス幻想絵画の鬼才「ジェラルド・ディマシオ」の絵画の大きさに圧倒されたり、懐かしいレコードの音色を満喫したツアーの感想を参加者に寄せてもらった。



圧倒された巨大画

草薙瑠璃子

新冠市街からバスで一時間も走った、かなり山奥の中に、真っ赤なトタン屋根にオレンジ色の壁のかわいらしい建物が、今回見学の目的の美術館。山々の木々の緑、花壇、広い庭にはたくさんの彫刻があり、ヨーロッパ的で素敵な風景が広がる場所で今も工事中でした。

「東京にもパリにもない芸術が新冠町にある」というパンフレットの言葉どおり、その建物の中に入り納得。

先ずその大きさに仰天の油絵。高さ9メートル、横27メートルの大きな絵は上下左右が鏡で囲まれていて、どこまでが絵でどこからが鏡の中なのか私には全くわからず、ただ圧倒されたのが第一印象。そしてこの絵が本当に一人の人間が描いたのかと思うように、繊細で緻密な形や構図（私はあまりわからなかったけど…）。でもやっぱり天才的な才能なのでしょう。美術館の係の方が会場を暗くして音楽と色彩や光の演出で更に絵の内面を見せてくれた15分ほどは、夢のなかのようでした。

あとで説明書を読むと、人間の誕生した何万年も昔の過去とこれから何万年の後、未来に思いをはせた幻想的な世界を描いたとか。

私はディマシオの絵そのものが好きではなく、

恐ろしさを感じてしまいましたが、またもう一度、一人でゆっくり見に来たいものと思いました。

世界最大の油彩画にご対面

中谷りょう子

友人からディマシオ美術館へ行くと聞き、今回のバスツアーに参加させていただきました。新冠にその美術館がオープンしたと新聞で知った日からずーっと気にかけていたのです。世界最大の油彩画にご対面。出会ったことのない表現がそこにありました。美しく、美しく引っ張られていく思いでした。略歴では生活を規則的にし、バランスのとれた食事と十分な睡眠、そしてテニスなんか楽しんじゃって。へえ～、この画家は立派に仕事をしていますね。

芸術家は体調を崩すほどのたうち回って作品を生み出すものと思っていた私にはこのスタイルはオーバーかもしれないが感動。私もしっかり生きなきゃアカンなあ～。

バスの出発時間となり、出口に行こうとして、気になることがあり急いで引き返して、あるポイントを注意深く見ました。やっぱり描かれていました。瞳の中に猿が！ 私が想像した通り。やっぱりまた見に行こう。まだまだ確認するところがたくさんあると教えてくれたバスツアーでした。

円山動物園

《よいこつよいこ》像

修復作業順調に進む

札幌・円山動物園の入り口前で子供たちに長年親しまれてきた《よいこつよいこ》像の大きな修復工事が始まり、春には装いを改めた像がお目見えする。

この像は札幌を代表する彫刻家、山内壮夫（1907－75年）の作品で、65年前の1952年（昭和27年）に制作されたが、コンクリート製のため長い年月



の間に亀裂が入るなど老朽化が進み、コンクリート像としての物理的限界が来ていた。友の会などが再三、札幌市に修復の必要性を訴えていた。

修復にあたっては、像本体の制作過程の詳細が不明のため、

これらを調査しながら劣化した塗装を慎重にはがした。また、作業の過程で内部が中空であることがわかった。また、粘土で造形したのち型を取り、大きく3つの型にし、それらを使用して内側からモルタルを貼り付けながら制作した様子もわかった。内部には発泡ウレタンを十分に充填し、さらに低圧でひび割れ個所にエポキシ樹脂を57カ所注入した。さらに、最大の欠損個所である白鳥の尾羽も札幌在住の彫刻家、唐牛幸史さんの協力で修復された。

これまで動物園前のロータリーに設置されていた像は修復後、広場が駐車場になることから動物園入り口付近に移設される見通し。

中島公園《木下成太郎像》も修復

戦時下の制作で腐食進む

札幌・中島公園にあるブロンズ彫刻《木下成太郎像》も修復作業が始まり、昨年秋にはブロンズ像が台座から取り外され、同公園事務所に運び込まれた。

木下像は1941年（昭和16年）、近代日本彫刻の巨匠、朝倉文夫の作で翌年公園に設置され、野外彫刻としては道内では最も古い作品の一つとされる。

木下成太郎（1865—1942年）は戦前の北海道選出の政治家

で本道開発に大きな足跡を残したばかりでなく、武蔵野美術



大学と大東文化大学の創始者としても知られる。

像は高さ160cm、重さ230kgで、戦中の金属回収令を免れた数少ない朝倉作品の一つ。

制作から70年以上経ち、台座の接合部分などの腐食が進んでいることから武蔵野美術大学彫刻学科の黒川弘毅教授の手で修復されることになった。今年夏までに改修されて再びお目見えする予定。

彫刻補修・保存対策委設置要請

札幌市文化部和懇談

友の会は昨年10月19日、札幌市の文化部和懇談、市に対し野外彫刻の補修、保存対策委員会の設置を要請した。

会からは橋本会長ほか4人が参加、《よいこつよいこ》像、木下成太郎像の修復作業状況などを説明、市側に対し、補修・保存対策委設置、新年度のブロンズ彫刻清掃、補修の教科について強く要請した。

17年度友の会彫刻清掃 ケプロン・黒田像で終了

友の会の本年度の彫刻清掃が昨年 10 月 9 日の《ホーレス・ケプロン像》と《黒田清隆像》の清掃で終了した。

この日は曇り空ながら日差しもあり、札幌・大通公園西 10 丁目にある二人の像も紅葉に映えて晩秋のたたずまい。



高圧洗浄機による水洗いでは脚立を使い、像の最上部にも念入りに水を噴射して丹念に洗浄した。

清掃には 15 人ほどが参加。1 時間ほどで北海道開拓功労者の像を洗い流した。

これより先、9 月 26 日には札幌・羊ヶ丘展望台にある《丘の上のクラーク》像

を清掃した。観光客に水がかからないように、バスが到着する前の作業。高圧洗浄機による水洗いのほかワックスがけ、乾拭きなど手際よく行った。

「くりのみ幼稚園」に彫刻

彫刻家・唐牛幸史さん

札幌の彫刻家、唐牛幸史さんが制作したブロンズ彫刻が昨年秋、札幌くりのみ幼稚園（札幌市豊平区月寒西 5）に出来上がった。

園児と子供たちが戯れているほのぼのとした作品。



一昨年、友の会の後志バスツアーで唐牛さんのアトリエに立ち寄った際に制作中だったもの。

2018年友の会新年会

1月21日 奥井理ギャラリー

友の会の2018年新年会を下記の通り行います。

◇日時 1月21日（日）
11:00から

◇会場 奥井理ギャラリー
（札幌市中央区旭ヶ丘
5-6-61 ☎011-521-3540）
◇会費 4,000 円

友の会元役員

桑原昭子さん逝去

長年、友の会の活動に携わり、2007年から11年まで役員として活躍した桑原昭子さん（75）が10月2日亡くなった。2010年から16年までは札幌消費者協会会長も務めた。

訂正とおわび

昨年10月発行の友の会会報「いずみ」61号7ページ、「友の会ニュース」の「猪股会員が基本デザイン フラワーモニュメント」の記事に誤解を招く表現がありました。

記事では猪股さんが札幌市のロゴマーク「サッポロスマイル」を基本デザインしたように受け取られる表記がありましたが、猪股さんがデザイン、作成したのはロゴマークではなく「サッポロスマイル」をかたどったフラワーモニュメントでした。

札幌市、猪股岩生さんほか関係者にご迷惑をおかけしました。訂正してお詫びします。

事務局日誌 ▼10月8日＝定例役員会(エルプラザ)「いずみ」62号編集企画ほか ▼9日＝ケブロン・黒田像清掃(大通公園) ▼19日＝札幌市文化局訪問(野外彫刻補修・保存対策委設置要請) ▼21日＝洞爺湖芸術館へ「ブロンズの出来るまで」DVD 貸 ▼23日＝円山動物園《よいこつよいこ》像の修復作業開始 ▼11月5日＝会報「いずみ」検討会(エルプラザ) ▼9日＝定例役員会(エルプラザ) ▼11日＝黒川武蔵野美大教授のブロンズ像蜜蝋塗布実習雨のため懇談会に切り替え(彫刻美術館研修室) ▼12日＝中島中学校出前講座 ▼24日＝北海道150年事業で道庁訪問(彫刻地図コンテンツの活用法など提唱)

編集後記

▼2018年のスタート。今年も友の会の活動を記録し、会員相互の交流に役立つ会報作りを目指したい ▼今号から会報編集に心強い応援者が登場した。吉田千代、押野記代子両会員。早速、原稿のレイアウト、校正をお願いした。今後の支援を期待。
(大内)

札幌彫刻美術館友の会
会報「いずみ」 No.62
2018年1月1日発行
発行人 橋本 信夫
編集者 大内 和
(札幌市清田区清田5-4-6-30
011-884-6025
印刷 山藤三陽印刷)

会報「いずみ」62号 目次

自作自選32 《門》	永野光一	表紙
作者の言葉		2
宮の森の四季32「雪降る庭園と彫刻たちの休息」	山田のぞみ	2
風見鶏「記憶素子―丸山隆と教え子たち」展	藤本和彦	3
リポート「夕張・採炭救国坑夫の像」	高橋大作	4
リポート「秋のバスツアー感想文」	草薙瑠璃子、中谷りょう子	5
友の会ニュース		6-7
《よいこつよいこ》像修復／《木下成太郎》像修復／市文化局と懇談／ケブロン・黒田像の清掃／唐牛さんが幼稚園に彫刻設置／友の会新年会予告／桑原昭子さん逝去／訂正とおわび		
事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか		8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本館

■コレクション展

「触れる彫刻・手で見るアート」

開催中～2018年4月15日(日)

美術館所蔵のブロンズや木や石の彫刻に手で触れて鑑賞する展覧会。目で見るだけではわからない素材の質感、量感、立体感をじっくり味わうことが出来る。

■さっぽろ雪像彫刻展2018

1月下旬

札幌市内の作家や学生が美術館の庭に雪の彫刻を制作、公開する。

記念館

■常設展示(通年)

「本郷新の人と芸術」

本郷新が手掛けた野外彫刻の石膏原型や代表作を展示するとともに各種資料により本郷新の人となりや制作姿勢を紹介する。

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください

<http://sapporo-chokoku.jp>